

人権なら

2018年9月1日

第93号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

優生手術はなぜ行われたのか

やまゆり園事件2年を経て優生思想を考える

「やまゆり園事件から2年、しょうがいのあるなしで命に差はないー優生思想を考える」集会が7月28日、奈良市中部公民館であった＝写真。障害者差別をなくす条例推進委員会と相模原やまゆり園事件を考える会・奈良が主催した。



旧優生保護法によって強制不妊手術をさせられた被害者が3月28日、仙台地裁に提訴した。旧優生保護法は「優生上の見地から不良な子孫の出生を防止する」を目的につくられ、全国で16,500人が手術を受けさせられた。この優生思想はやまゆり園事件ともつながっている。被害者の声と全国弁護士団弁護士の話を聞いて考えよう、とのねらいで集会は開かれた。

人らしく生きていくのに大切なことは何か

四田俊男さん(ピープルファースト奈良)が司会を務め、中村清司さん(同)が「事件から2年。この間も全国の施設や家庭で障がい者への差別・虐待があった。法律や条例ができたが、事件はなくなる。人が人らしく生きていくのに大切なことは何か、を皆さんと話していきたい」とあいさつした。

優生手術裁判・東京訴訟の原告、北三郎さん(75歳)の証言録音が流れた。「中学生だった1957年に宮城県内の教護院(児童自立施設)にいたが、何も知らされないまま手術を受けた。施設の先輩から子どもを産めなくなる手術だと聞かされた。72年に結婚した

が、妻にも言えずにいた。国は人生を返してほしい」と語った。話を聴いていて、胸が苦しくなった。

国の謝罪と補償求め、全国各地で訴訟

続いて、全国優生保護法被告弁護団の辻川圭乃弁護士が「優生手術はなぜ行われたのか」をテーマに講演した＝写真。「優生保護法」は1948年に成立。目的は「不良な子孫の出生を防止する」こと。そのため、「優生手術(不妊手術)や人工妊娠中絶」などを行う、とした。また、「優生手術の対象は多岐に及び、遺伝性以外の精神病、精神薄弱などにも拡大」された。宮城県の60代女性は1歳の時、口蓋裂手術での麻酔が原因とみられる重度の知的障害に。「15歳で卵管を縛る手術を受けた」。だが、「台帳には遺伝性精神薄弱」と記されていた。



日本精神神経学会は1991年、優生保護法は「障害者の基本的人権を侵害し、生存権まで脅かす内容」と批判。1996年には母体保護法に改正された。だが、政府の対応は進まず、国連人権規約委員会が1998年、日本政府に対して「強制不妊手術についての補償を受ける権利」を勧告する。2014年、国会で「障害者権利条約」が批准され、23条で「障害者の生殖能力を保持する」が明記された。

辻川さんは最後に、全国の被害状況を説明。不妊手術被害者数は24,992人にも及ぶ。国の謝罪と補償を求め、各地で訴訟が始まっている、と語った。

会場からは質問・意見などが活発に出た。改めて「やまゆり園事件」と「優生思想」の根底にある人間と社会(国家)のあり様を考えさせられた。

三宅町職員が人権学習

山下力・なら人権情報センター顧問が話

三宅町「第1回職員研修」が8月22日にあった。主催は町総務部。NPOなら人権情報センターが委託を受け、企画・運営を行った。今年度は3回開催の予定。



岡橋正識・総務部長があいさつ。「人権啓発をめぐり、行政職員が果たすべき役割や、行政が取り組むべき施策を再認識することを目的に、人権問題に特化した職員研修」を持った、と研修の目的を述べた。

講師は山下力・NPOなら人権情報センター顧問。「グラブ・ミット生産100年、その盛衰から学ぶ」をテーマに話をした。山下さんは「自らの立ち位置から、人権問題について話をしたい」と前置きし、「人権問題というのは踏みにじられている当人にとっては死にたいほどの苦しみを抱えるものだが、他人事と聞き流すと痛くもかゆくもない問題」だ、と語り始めた。

かつて、「また、同和か！」と言われるほど、研修が行われていた時代があった。「三宅町の職員研修で話をさせていただくのは初めて」だが、三宅町の職員になった限り、ぜひ覚えてほしいことがある。奈良県は全国47都道府県で最も「同和人口比率」が高いこと。その奈良県でも三宅町が一番高い、と述べた。

一時期は皮革製スポーツ用品生産拠点の町

全国高校野球100周年記念大会が終わった。三宅町で「グラブ・ミット」の生産が始まり、100年になろうとしている。この小さな三宅町からプロ野球選手が3人も出ている。このことを、ご存じの方は少ないと思う。

上但馬(旧五伝村)では、人口急増が2回あった。1つは、第一次世界大戦(1914-1918年)の戦後復興期。もう1つが皮革製運動靴とグラブ・ミットの盛況

期(1955-1968年)だ。大正時代に皮革関連事業の中心地、大阪・浪速区大国町近辺へ職の見習いに入り、美津濃などのスポーツ用品業者との出会いがあった。大和鉄道の開通(1918年)で但馬一王寺一湊町(大国町)は身近に。戦後の野球ブームに乗って、町は「皮革製スポーツ用品の生産拠点に成長」した。

この時期、グラブは全国シェアが9割を超えたことも。しかし、1971年・73年のオイルショック、ドルショックで海外輸出が打撃を受け、一気に衰退した。さまざまな要因があるが、労働集約型のグラブ作りは「相対的な低賃金」を求めて、国際社会を移動していくという「資本主義社会の必然」のなか、上但馬の地から消えてしまった。



スキー靴も素材がすべてプラスチックに代わり、「一体成型」への技術革新競争で敗北した。さらに、「スノーボード」ブームが追い打ちを掛けた。

小さな町が胸張れる障害者運動、学童保育

次に、1965年「同対審」答申、69年「特措法」を経て、2002年の法失効まで「約15兆円の国費が投入」されたことや、部落解放同盟の活動を紹介。「南都銀行」就職差別事件、「奈良トヨタ」地名総監購入事件などの取り組みからは、「近畿統一用紙」が生まれた。

現在の到達点は「部落差別をはじめ一切の差別がない社会など、どこにも存在しない」「部落民もまた差別する。人間、誰もが差別したり、されたりする存在」だ。部落解放運動は「賤視、忌避、排除などの形態で出現する部落差別を媒介として成り立つ人と人との関係、および共同体相互の関係を解体し、共生と連帯の関係として再構築しようとする営み」だ、とした。

最後に、三宅町として大切に、支えて欲しいのは、同和教育運動から始まった、共に地域で生きたいと頑張る障害者運動。子ども会・児童館活動から始まった「学童保育」。国に先駆け始まった「幼保一元」の取り組みだ。これらは三宅町が胸を張れることだと話した。

「大和の地域社会」を学ぶ

県民歴史講座で「天文一向一揆」など2講義

第2回「県民歴史講座」が8月7日、県立同和問題関係史料センターであった。清水有紀・研究員が「近世の大和神社と地域社会」、奥本武裕・所長が「天文一向一揆と大和の地域社会」と題して、それぞれ講義した＝写真。



1講目の清水さんは、大和神社は「二十二社に数えられる古社」だった。だが、律令制の衰退で国家の庇護を失い、「大火や兵火で神体や神殿を焼損」した。近世以降は「氏子の村々によって祭祀」が行われるようになった。「宮郷」は旧9か村から成る。現在も氏子9町が継承し、通称「ちゃんちゃん祭り」(神幸祭)が4月1日に行われている。渡御の前には境内で新泉(大字)の太鼓、梅ズワエ(梅枝)と兵庫(大字)の龍の口を持ち、露店を回り、祝儀を徴収する。近世の穢多村が持っていた草場における「芝銭」徴収権と関係(歴史的な性格)があるのか。今後の研究課題である。

浮かび上がる近世の大和神社をめぐる様子

続いて、「大和神社の概要」「大和社の祭祀組織」を説明したあと、「吉田神道家」について、「神道の本所として室町時代後期以降、勢力を増し、江戸時代には寛文5年(1665)の『諸社禰宜神主法度(しよしゃねぎかんぬしはつと)』によって幕府の公認を得、諸国の神職を把握した」とされる。その活動とともに、いくつかの対立「大和社神主の社地住居をめぐる争論(寛永5年・1852)」「宮郷における東佐味田村の地位をめぐる争論(安政5年・1858)」などを多くの史料とともに、動画も使って紹介した。

宮郷と神主の対立や、宮郷内部の対立、地域社会の揺れなど、近世の大和神社をめぐる姿が浮かび上

がってくる感じがした。

「百済衆の実態解明」は残された大きな課題

2講目の奥本さんは、「一向一揆」のイメージは、「江戸時代の百姓一揆を投影する形で、戦後のマルクス主義歴史学の隆勢の中で広く流布」した。「被差別部落の一向一揆起源説」なども妄論だと述べ、そのことを裏付ける多くの史料を紹介した。

続いて、「天文一向一揆の経過」「背景」「一揆のリーダー」を説明した。「門徒集団」の分析としては、「奈良衆の実態」は、一揆前はほとんど不明としながらも、「奈良町を中心とする門徒集団で、15世紀には成立」していた。これまで一揆に蜂起したのは奈良町の裕福な町人門徒と考えられてきたが、穢多を含む多様な階層の人びとが加わっていたことが確認できる。



また、「百済門徒」は広瀬郡百済を中心とする門徒集団であること。教行寺(広陵町)の由緒書よれば、百済庄内東迎田の願成寺祐淳が領主箸尾氏と争って敗れた際、教行寺が「頭銭」を支払い、命を救ったため、願成寺門徒や、その傘下の道場・門徒は、すべて教行寺に吸収された、とされる。

田原本町大綱には、祐淳を開基と伝える教行寺(真宗大谷派)が所在する。江戸時代には「百済衆」は東本願寺教団の箸尾教行寺に、「曾根衆」は西本願寺教団の曾根名称寺に、それぞれ発展する。いずれも大和国最大の中本山となる。両寺とも多くの穢多村寺院を下寺としていた。

最後に、「百済衆の実態解明」は残された大きな課題である。大和の天文一揆の主体として、「奈良衆」のほかに、「西京」に展開した百済門徒の展開が析出してきた。百済門徒から派生した教行寺・名称寺と、穢多村寺院の深い関係を前提とすれば、天文一向一揆に参加したと想定される奈良町周辺の穢多も、百済門徒として理解すべき、と話した。

石元清英さんが話題提供

運動史の編纂作業に並行して学習会

現在、進めている奈良部落解放運動史の編纂作業とともに、この事業を多くの人との新たな出会いと交流の場にするため、「部落史



や差別をどう考えるのか」の勉強会を持つこととした。

第1回学習会は6月30日、三宅町あざさ苑で行った。石元清英さん(関西大学)が「なぜ大学生は部落に対してマイナスイメージや誤解をもってしまうのかーこれまでの同和教育を検証する」と、話題提供した。

「部落や部落差別」をめぐる学生が持つイメージについて多く上がったのは、「暗い」「貧しい」「閉鎖的」。学生たちの部落に対する意識や認識には、「リアリティー」がない。つまり、「自分の世界とは遠くかけ離れたどこかに存在するのだろう」とみている。これらは、「同和教育」が具体的な内容に踏み込めなかったことが大きな要因。「歴史だけを教え、今を教えない」→「血筋幻想を強化」「部落差別の厳しさの一面的強

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

自民党衆院議員が性的少数者(LGBT)は「子どもを作らない。生産性がない」と差別発言した。党内には容認の声も。党幹事長も問題視しない有様だ。当の議員のマイノリティーへの差別意識は強烈だ。人間の価値を「生産性」基準に求める極右ナチ思想の持ち主だと言える。ネトウヨに人気があるようだ。選挙運動の弁士にも引き出されている。一方、この差別発言を批判する動きも活発で、希望が持てる。当事者たちも声を上げている。少数者への攻撃を繰り返す反人権思想の差別排外主義の議員たちは、国会から即、退場させなければならない。人権派勢力の伸張が必要だ。

調」→「部落＝異質なコミュニティー」となっている。部落とは、どこか知らないところに、自分たちとはまったく違った血筋の人たちが代々、住み続けている閉鎖的なコミュニティー、という意識なのだ。

また、「血筋を相対化する」として、現皇太子の祖先を示した「系統図」を紹介。「大正天皇のお母さんは柳原愛子と言います、明治天皇の側室。明治天皇には側室が9人いた。その中の一人」。つまり、「どんな人でも数え切れないほどの血が混じっていて、今の自分がある。特殊な血筋、汚れた血筋、尊い血筋ということは意味をなさないことが分かる」。



最後に自分の周りの人間関係を変えていくことが重要だとして、「会話の支持作業」の大切さと、「ミソジニー(女性に対する見下し意識)」の克服を指摘。人権を学ぶことは良好な人間関係を築くことに繋がる。職場環境なども良いものになっていく、と語った。

「ああこの国では」を熱唱

新井英一ライブが8月4日、三宅町文化ホールであった。昨年に続き、松田暢裕さんが呼びかけた。「ムジゲ・虹」(韓国・朝鮮の勉強



会)もスタッフとして参加した=写真はリハーサル。

「闇から光へ」「望郷ブルース」「死んだ男の残したものは」「ああこの国では」などの曲を歌い上げた。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail:info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/